
化物語 -もう一つの物語-

神無月愛衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化物語 - もう一つの物語 -

【Zコード】

Z8451Z

【作者名】

神無月愛衣

【あらすじ】

“この世界だって、無数に存在する平行世界の一つにすぎないんだよ”

夏休みが明けしばらく経つたある日。阿良々木暦は気付かぬ間に、今まで最も最悪な目に陥つてしまつのだつた。すっかり変わつてしまつた世界で、為す術もなく混乱する暦がとつた手段とは

登場人物

『化物語』 - もう一つの物語 -

{ 登場人物 }

・阿良々木暦
・戦場ヶ原ひたぎ

・八九寺真宵
・神原駿河

・千石撫子
・羽川翼

・忍野忍
・阿良々木火憐

・阿良々木月火
・忍野扇

・斧乃木余接
・臥煙伊豆湖

{ 注意書き }

・この小説の語り部は、お馴染みの阿良々木くんです。

・時系列は、『鬼物語』から数日が経った頃。

・私オリジナルなので、所々、キャラクターの口調などが違うかも
しませんが、『物語シリーズ』の

雰囲気を出せるよう、頑張ります！！

第一話 プロローグ（前書き）

私が好きなアニメの一つ『化物語』。

今回その小説を書いてみました。

時系列的には、『鬼物語』のあとでどうか。

私なりの『物語』の世界をお楽しみください

第一話 プロローグ

忍野忍は、僕の中で最も大切な 戦場ヶ原を除いて 存在である。

その関係は、何度も繰り返すように、第三者からは、分かりづらいものだろう。

忍は僕の主人で。

僕は忍の主人で。

これ以上ないくらい ややこしいものである。

理解不能なくらい またはそれ以上。

それでも、誰がなんと言おうと、忍は大切な存在なのである。

あの頃 春休みが終わった瞬間から。

または、春休みが始まった……彼女と出会った瞬間から。

片時も忘れることがないくらい。

大事なのである。

一生背負っていくと 誓つたのである。

そんな忍が、今、旧名の『キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード』ではなく、『忍野忍』でってくれることは。いてくれることに。

僕は感謝している。

その、外見年齢八歳の幼女の姿でてくれる事が。

何よりの安心感を生む。

安心して今日を生きていられる。

あの、自殺志願の吸血鬼でいるのではないことに、感謝している。それくらい大切で、一生背負っていく存在の忍だがしかし である。

今はもうないけれど もしも。

もし、あの時。

春休みに 忍と。

あの伝説の吸血鬼 鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼である
キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードに。

怪異に、出遭つていなかつたら？

たとえ出遭つたとしても、血液を差し出していなかつたら？ ど。

考えてします。

思つてしまふ。

けれど、忍と出会つていなかつたら。

あのときブラック羽川と対峙することも。

あのとき螺旋階段で戦場ヶ原を受け止めることも。

あのとき八九寺を案内することも。

あのとき神原と命懸けで戦うことも。

あのとき呪われた千石を助けることも。

みんなと 出会つことはなかつたのである。

あの日をきつかけに、今がある。

確かに、『今』が。

羽川と戦場ヶ原と八九寺と神原と千石がいる。

今は、なかつたのかもしけないのである。

そう思つて、春休みのことが、案外いい出来事だったのかもと思える。

あの地獄を きつかけにみんなと出会えたならば。

それでチャラにできる。

……結果的になにが言いたいのかといつて、春休みの出遭いがあつて今がある。

なら、春休みのことがなかつたひびつかなのだらうか？
と言つことである。

僕はそのことを、身をもつて知ることになった。

僕は『それ』に、直面する羽田になつた。

今からその出来事を、一つの物語を。

僕 阿良々木暁みやびが、語りつと思つ。

第一話 プロローグ（後書き）

いかがでしたか？ プロローグは。

『物語シリーズ』は最も好きな小説で、何回読んでも飽きないくらい好きなので、書

くのはちょっと大変ですが、楽しいです！

この調子で頑張っていきたいと思っています。

続きも、更新は不定期ですが、是非読んでください！

第一話 戦場ヶ原ひたぎとの口論（前編）

『第一話 戦場ヶ原ひたぎとの口論』 ここは（ネタバレですが）
、ひたぎと『

の会話だけで終わってしましました。書いている私的にはびっくり
です。

でも、原作とは違い、更生できていないところを歴史に見せてくるの
で、いい会話に

なったと思います。

それでせじうど

第一話 戦場ヶ原ひたきとの口論

夏休みが明けてしまはらく経つた。

タイムスリップした直後に『くらやみ』に遭い、凄く仲がよかつた友人（この言葉だけでは足りない）である八九寺真宵を亡くしたり と。

忙しい夏休みと夏休み明けではあつたが（宿題にはそんなに手をつけていなかつたので怒られた）、とかではなく、普通に許された。と言つたか、見限られた）、まあ、それなりに充実していただろう。

「夏休みね。私達、結構色々なことをしたわよね」

と、戦場ヶ原は、思い出に浸つていていた風に言つた。

「阿良々木くんを監禁したり……、阿良々木くんを監禁したり……、監禁したり」

「僕を監禁したことしか思い出せないのか、お前は」

つづづく酷いやつだよ、戦場ヶ原は。

時は夏休み。今、僕と戦場ヶ原は、一緒に仲良くお弁当を食べている。

……そんなときの会話がこれつて、どうかと思つが。

「冗談よ。バイキングにも行つたじゃない……あれ？ 行つたから？」

「覚えてくれていて嬉しかつたが、それを言つた直後の言葉は聞き捨てならんな」

「ごめんなさい。私、自分に都合が悪いことは忘れてしまう頭なの」「僕と一緒にバイキングに行つたのは、そんなに悪いことだったのか！？」

「ええ」

「否定しないのかよ！」

「どんだけ僕の存在が邪魔なの！？ いくら何でも酷いだろ！」

「つたく……。戦場ヶ原、本当に更生したのか？ 毒舌が戻つてき

てこる気がするんだが……」

「しまつた！ 今は阿良々木くんの前だつたのよ！ 忘れていたわ！」

「ん？ 何か言つたか？」

「いいえ、更生しきれていない戦場ヶ原ひたぎは何も言つていな
わ」

「自分で更生できていないって言つちやつたよー。」

羽川の努力が無駄になっちゃつた！

……でも確か、原作だと更生しているんだよな……。

ここが原作とこれとの違い……か……。

「阿良々木くん」

「何だよ、戦場ヶ原」

戦場ヶ原の手作り弁当を食べている僕に、唐突に、

「無事に帰つてくれてありがとう」「う」と

につくりと微笑んで戦場ヶ原は言つた。

そして、何かを考える暇もなく、戦場ヶ原はこう続けた。

「私ね、別に心配はしていなかつたのよ。阿良々木くんが無事に帰
つてくるつて信じていたから」

「戦場ヶ原……」

感動的な台詞だ……！ 戦場ヶ原にしては珍しい！

「でも、阿良々木くんから『しんぱいすれな』つてメールが来たと
きは、私もさすがに心配したけど」

「まあ、そうだよな……。あんなメールが来たら普通……」

「ええ。私は阿良々木くんの頭を心配したわ

「…………」

いい雰囲気だつたのに……。

台無じじゃねーか。

ちやんと更生しろよ……。

「……まあ、そのあとに、阿良々木くんから、『あの件』について
聞いたときは、ああ、私の考えていたことは、阿良々木くんを心配

していたのは全て杞憂だったのねって思ったわ

「『あの件』って何だよ」

「阿良々木くんが幼女と童女と少女の全員とキスした件」

「…………」

それについてはちゃんと謝つたじゃん……。

ちゃんと『戦場ヶ原と羽川のラブシーンを見せつけられる刑』に、
僕処されたじゃん……。

今になつてそんなことを蒸し返すなよ。

案外根に持つてるんじゃないのか？ 戦場ヶ原は。

根に持つてなんかないわ。人聞きの悪いこと、言わないで頂戴

「お前こそ僕の心を読むな」

「そんなことはともかく」

と、惚れ惚れする手際の良さで戦場ヶ原は話題を変えた。

「ちゃんと言わせて頂戴」

「何をだ」

「黙つて聞いていなさい」

疑問を持ったことを一蹴した戦場ヶ原は、深呼吸をして、改めて
僕に向き合ひ、にっこりと微笑み

「おかげりなさい、阿良々木くん」

と言つた。

その言葉に、僕は嬉しさを抱き、思わず飛び跳ねそうになつたが、
そんな衝動を抑え、僕もまた、戦場ヶ原に言つのだった。

「ただいま、戦場ヶ原」と。

戦場ヶ原ひたぎ。

心配させて 待たせて、悪かつたな。

言つとは恥ずかしかつたから、心の中で、思つだけにしておいた。
いつか 言える、その時が来るまで。

第一話 戦場ヶ原ひたかとの口論（後編）

この小説は、昨日更新し始めたにも関わらず、今まで一番高い評価を頂きました

た！！

有り難いござりますーー。

さて次回は、羽川さんと駿河のじゅりかが登場しますーー！

それではまたじゅりか、歴の『口論』をお楽しみください

第三話 羽川翼との日常（前書き）

だらだらと続けて（そんなに書いてない）第三話。

今回は、羽川さんの登場です。

それでは、どうぞ

第三話 羽川翼との日常

そんな感じで戦場ヶ原と仲良くお弁当を食べて（戦場ヶ原の手作り弁当、めっちゃ美味かった）、昼休みを終えた。

そして一緒に教室へと帰り（途中で戦場ヶ原は、『お手洗いに行つてくるわ』と抜けたが）、席に座り、授業準備をしていると、「相変わらず仲がいいね、阿良々木くんと戦場ヶ原さんは」と、誰かが僕に声を掛けてきた。

その相手は

「羽川……」

クラスの委員長・翼だった。

成績優秀　一年の頃からずっと学年トップで、この前、全国模試でもトップだった　の優等生で、面倒見がいい。

一年の頃からずっと委員長をしていて、髪型も三つ編みで眼鏡といいういかにも『委員長』って感じの姿だった　のは、約一ヶ月前までの話。

今はショートヘアにコンタクト。

前の『委員長』という姿を思い出させないほど　変わった。
いわゆる、『イメチエン』である（本人もそう言っていた）。

そして　猫に魅せられ、虎に睨まれた少女。

戦場ヶ原が蟹に行き遭つたように　羽川もまた、猫に魅せられ、虎に睨まれたのだ。

「ゴールデンウイークと文化祭前日と夏休み明け。

……彼女は、豹変した。

ある『ストレス』などによつて

そんな羽川に、先日告白されたのだが……戦場ヶ原がいるため、僕はそれを振つたのだ。

少々思い出したくないことを思い出してしまつた……。

「んー？　どうしたの？　そんな顔をして」

「あ……いや……」

「何か思い出したくないことでも思い出したの?」

「…………」

「いつも相変わらず勘が鋭いな……。

「いつもおちおち話せねえ。」

「そうだ、阿良々木くん。今日、大丈夫かな?」

「ん? 何が?」

「委員長と副委員長としての仕事があるの」

「ふうん……別に大丈夫だけど……」

「そつか。ならよろしく」

「ああ」

用はそれだけだつたんだろ? 羽川は席に帰つていった。
そこへ丁度戦場ヶ原が帰つてきた。

「阿良々木くん? 羽川さま いいえ、羽川さんと何を話して
たのかしら?」

「おい、戦場ヶ原。今また羽川のこと、さま付けで呼んだろ?
「は? 何を言つてるの? 言いがかりは止めて頂戴」

「とぼけるのか!? じじで!?」

「別に私が羽川さんのことなどをどう呼んでいたって構わないじゃない。
阿良々木くんに言われる筋合いはないわ
「僕つてそんなに邪魔なのか……?」

本当に更生しているのか?

羽川に再び強制プログラムをやつて貰うか。

「そんなことより、何を話していたの?」

「いや。別にたいしたことじゃないよ。ただ、今日は委員長と副委
員長としての仕事があるから、ちゃんとやってね、と、大丈夫?
つて」

「ふうん……なら、今日は一緒に帰れないわね」

「ああ……。そうなるわ」

「じゃあ、私は先に帰つておくわ。阿良々木くんを待つても、無

意味だし

「酷いな」

「いえ……そうではなくて、ただ単に、私が用事があるのよ」

「そうなのか

「ええ。その代わり、明日は一緒に学校へ行きましょう」

「そうだな、そうしよう」

「ええ

もうそろそろチャイムが鳴るな。

戦場ヶ原に、座つた方がいいんじゃないのかと言おうと思った。しかし、いつの時だった。

「このまま……」

「え？」

戦場ヶ原がいきなり 不意に、窓を眺めながら、独り言のよう
に呟いた。

「」「このまま、何事もなく、平和が続けばいいのにね

「…………」

確かにそうだな。

春休みを境に、色々な怪異に僕は遭遇した。

鬼。鬼。

猫。蟹。猿。

蝶。牛。

鳥。蜂。蛇。

そして

あと 死体。

「……阿良々木くん？ 考え事かしら？」

「あ……いや、何でもないよ」

「そつ。なら、私はこれで。チャイムが鳴るから」

「ああ。じゃあまた」

「ええ」

そう言つて戦場ヶ原も席へと戻り 何事もなくチャイムが鳴り、

授業が始まった。

平和 か。

確かに…… 続けば、いいのにな

何事もなく。

怪異にも遭わず。

まあ、その、戦場ヶ原の、『平和が続けばいいのに』という願い

は 浅はかな祈りは。

あつさつと 碎かれるのであつた。

第三話 翠川翼との日常（後書き）

この小説は、数話日常的な出来事をやつて、怪異絡みの事件に突入していきます。

どんな事件がお楽しみに（少しだけありすじに書いてちやつてゐるし）

はいそんな小説の次回は、いよいよ神原駿河の登場です！！

楽しみですね～？

では、また次回会いましょう^_^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8451z/>

化物語 -もう一つの物語-

2011年12月28日20時56分発行